

おじさんの青春日記

くその4く

「阪神淡路大震災」

神戸市立本山第三小学校にて

		ふるさと				
--	--	------	--	--	--	--

その日、李浩麗はもう三時間余りも楽譜を片手に檻（おり）のなかの動物のように部屋を歩き回りながら、彼女自身が編曲したモンゴル民謡メドレー「蒙古牧歌」を繰り返し口ずさんでいた。新春を祝う神戸市内のホテルでのコンサートは一週間後に控えているというのに、独特の節まわしのモンゴルの古曲は何度歌っても納得できるものに仕上がらなかった。広大な草原を疾駆する馬のように早いテンポの旋律のあと、騎馬の男女が恋を語らう叙情的で緩やかな旋律に移る。テンポの緩急は繰り返し続く。

楽譜に無造作に書かれた原曲の音符や記号を李浩麗は何度もうらめしく思っ、譜面を指先で弾いた。

「もうええわあ。あした起きてからにしよう」

ベッドのそばにおいた中国製のアンティーク時計は午前二時をまわっていた。

一九六四年（昭和三九年）神戸に生まれた李浩麗は、台湾をルーツとする華僑の三世である。

一八九四年（明治二十七年）勃発した日清戦争に勝利した日本は清国から約三億一千万円余の賠償金を獲得するとともに、他の清国領土とともに台湾を植民地としてその統治下においた。日本による台湾の統治は一九四五年（昭和二十年）、日本が太平洋戦争に敗れるまでの五十年の長きにわたって続く。当時の日本政府は台湾の植民地経営にあたってさまざまな冒險的、進歩的な政策を取り入れようとした。

明治維新によってそれまでの世襲の地位を失った武家の子弟達が、近代的な知識を携え、志（こころざし）に燃えて東シナ海を台湾へと渡った。彼らにとって台湾は日本による資本収奪の場というよりも、国家経営の壮大な実験場と映ったことだろう。彼らの試みは被支配者である台湾住民の非協力や反抗にあつて難航を極めたが、武士の末裔達がもたらした技術や思想は無数の種子となつて日本語とともに台湾各地に根を下ろした。

日本はその後、大正、昭和と急速に軍国主義に傾いてゆき、アジアを中心に版図を広げ、やがて滅亡の時を迎えた。しかし、江戸幕府時代の武士思想の土壌が付いたまま台湾に移植された明治維新直後の日本の価値観や思想の残滓は、日本本国が興隆から破滅へと進み、再び太平洋戦争後の復興を遂げる間にも台湾国内でゆつくりと熟成していった。

昭和の初期。当時、日本植民地下の台湾では真珠が珍重され、庶民のあいだで大変な人気を呼んでいた。安政五年（一八五八年）三重県鳥羽に生まれた御木本幸吉によって明治期に日本で最初に開発された養殖真珠は盛んに海外へ輸出されており、日本真珠の代名詞となつた「ミキモト」の名声は台湾にも届いていた。

李浩麗の祖父、李通坐は日本の三重県志摩半島一帯で盛んに商われていた真珠に強い興味をそそられ、実兄、李通寿とともに日本へ渡ることを決意した。日本の植民地であった台湾の青年たちにとって、宗主国日本に渡つて商売を始め、成功をその手にすることは果てしない大きな夢であった。

一九三三年（昭和八年）、李通坐の六歳年上の兄、李通寿が日本へ渡る。四年後の一九三七年（昭和十二年）、李通坐が兄の後を追つて日本へ。通坐、二十歳であった。わずかな荷物を手に台南を出た李兄弟は三キロの陸路を北の港町、基隆へ。さらに海路を神戸へ。青雲の志を抱いて日本めざして東シナ海を渡る李兄弟。

志摩半島で真珠の玉を買い付け、台湾市場に卸す商いから、二人の事業はやがて神戸に根をおろして、ブローチやネックレスなどの宝飾品の加工業へと発展していく。

日本敗戦直後、李通坐は台湾から妻や家族をまだ空襲の爪痕も生々しい神戸に呼び寄せた。祖国も戦場となつた日本の長い戦争が終わつて、李一家はやつと神戸を安住の地として平和な日々を取り戻したのである。

神戸は日本でも有数の真珠流通の町。かつて神戸で「真珠王」と呼ばれた商人も台湾の華僑であり、日本に在住するいわゆる華僑約二五万人のうち、その半数が台湾由来の華僑であ

る。「僑」とは仮住まいの意。華僑は生まれ故郷の中国本土や台湾を離れ、世界中の地域や町に根づき、その土地に溶け込んでさまざまな事業を営んでいる。緊密なネットワークを張りめぐらせていて、互いに助けあい、支えあふ。時には彼らが居住する国の政治、経済政策まで左右する隠然とした影響力をもつこともあるのである。彼らの祖先が生地、中国を離れた瞬間から中国人でありながら中国人ではない、いわば世界人として地球を祖国として生きていく宿命を負っている。

創業者である父親、李通坐の事業を継承し、経営をさらに発展させて日本での真珠宝飾品業、台湾での海老、魚の養殖業と手広く事業を営む、李文正の長女として李浩麗は生まれた。神戸市に生まれ、幼年期を神戸で過ごした浩麗は十歳の時に李一家のふるさと、台湾島南部の都、台南市に戻り、そこで十八歳までを過ごした。

台南市は眼前に中国大陸を望む、台湾海峡に面した港都。かつて清朝が隆盛の時代にはここに首府が置かれ、中国大陸やアジア沿海諸国、ヨーロッパとの交易、軍事の要衝の地であり、海路もたらされるさまざまな文化が混交する台湾きつての古都である。

南北に長い島である台湾は、首都である台北市から高速道路を南下すると、車が進むごとに土の色が茶色に変わり、車窓の外にバナナや椰子（やし）などの熱帯の植物が徐々に増えてくることに気づく。市街を抜けると人々の生活臭や工場が吐き出す人工の匂いは消え、生暖かく、潮のぬめりを感じさせる熱帯の豊かな風が鼻先を通りぬける。台南市は北回歸線よりもさらに南、台湾島の最南端にも遠くない熱帯の都市である。

李浩麗は南国の強い陽射しを体じゅうに浴びて、多感な少女期をこの地で伸びやかに過ごした。

一九七四年（昭和四九年）、李浩麗、十歳。日本では「日本列島改造計画」で華々しく首相の座に就いた田中角栄首相が世論の金権政治批判によつて退陣し、東京の片隅に日本最初のコンビニエンスストアチェーン「セブンイレブン」が産声をあげた年であった。

「道のまんなかを沢山の樽や農作物を載せた荷車を牽く水牛が悠然と歩くそばを走って学校へ通っていました。家族みんなを鈴なりに乗せたバイクやスクーターが私たちを追い抜いていくんです。そのたびに車輪から弾き飛んだ牛糞の交じった泥が私たちめがけて飛んでくるんです」

と笑いながら当時を回想する浩麗。

「台南にあった家は風通しを良くするために天井の高い家で、お隣りの家とは渡り廊下のような屋根つきの通路で繋がっていました。スコールの多い所でしたから、雨が降っても傘をささずにお隣さんと行き来が出来るんです。排水設備が悪くつて、大雨の時は家のなかでも雨靴で過ごしていたんですよ。その渡り廊下で近所の老人達がウーロン茶の品評会をやったり、子供達はローラースケートに興じたり」

神戸の都会に育った浩麗は数十年前の日本にタイムスリップしたような環境にとまどう。怒涛のような高度経済成長もインフレも耳をつんざく土木工事もなく、ここでは時間がゆったりと流れていた。

「縁日には野外映画会や地方を巡回して歩く旅芸人の演劇『歌仔戯（ゴアヒ）』が必ず上演されていました。自分の家から椅子を運んで、競いながら場所とりをして、星空の下で観るんです。リアカーで運ばれてくる移動式のメリーゴーランドというのがあって、わずかな料金を払って乗せてもらうんです。中華菓子や餃子（ぎょうざ）なんかを売る沢山の賑やかな屋台。竹で編んだ笠をかぶったおばさんが、バナナや龍眼やマンゴーなんかの果物を山盛りに肩に担いで町に売りに来てました。私が生まれた神戸の町のように清潔で隅々まで整備された町にはほど遠い町でしたが、なんだか日本にいるよりずっと豊かな感じがしたのを憶えています」

日本帰りの浩麗は同級生に珍しがられる。

「ねえ、日本ってどんなところ？ 寒いんでしょ？」
 「うん。台南に比べたらずっと寒くって、冬には氷を削ったみたいな粉雪が落ちてきて、町じゅうが砂糖を撒いたように真っ白になることもあるのよ」
 李浩麗は友達に聞かれるままに答える。

「わあ、雪ってすてき！ ねえ、コウベって大きな町なんでしょ？」
 目を輝かせる同級生。

「とつても大きな町よ。大きな港があつて、世界中から船が集まってきた、たくさん荷物降ろすの。中華民族が寄り集まって出来た町があつて、台湾と同じものが食べられるし、学校もあるし、外国人の仲間もたくさんいるのよ」

浩麗の通学する永福国民小学校は、台南市でも有数といわれる音楽教育に熱心な小学校。なかでも合唱活動は台湾国内でトップレベルにあつた。音楽の授業のなかでその才能を見いだされた浩麗は、五年生になって合唱グループの代表に選ばれる。音楽の世界との出会いであつた。中学生になってソロとして歌うようになり、成長にしたがつて音楽へのはるかな道を着実に歩みはじめた。

やがて十八歳を迎えた李浩麗は父に連れられて再び神戸に戻り、幼い頃からの夢であつた日本の音楽大学へ入学する。浩麗にとつて歌の世界は、究（きわ）めどもなお遠い芸術の道であり、台湾、日本と転地を重ねる彼女にとつて、日々の憂いを慰める無二の散歩道となつた。彼女はまるで歌を口ずさむような軽快な口調で関西弁の会話を交わす。

社会人となつた今では国際都市・神戸で頻発する中国系外国人訴訟の法廷通訳や、日中間の国際会議の同時通訳として働くかたわら、それらの間のわずかな時間をも惜しむように精力的な音楽活動に携わっている。

月曜日 早朝から神戸市内での国際会議の同時通訳。夕方終了。

同夜、神戸市内でのコンサートに出演。

終了後、スポーツジムでプールのなかを歩きながら

新しい曲の歌詞を覚える。深夜、翌日の法廷通訳に備えて、

資料の整理。

火曜日 午前中、神戸近郊の町でコーラスの指導。

昼食抜きで裁判所での法廷通訳。

その後、毎週通学する中国語教室で国際会議を

シミュレーションした同時通訳法の勉強会に参加。

夕方、結婚式場で聖歌を歌う。

夜、パーティーへ音楽仲間と共に出演。

水曜日 午前、弁護士とともに拘置所での中国人被告接見通訳。

終了後、裁判所での法廷通訳。

自宅で小学生のピアノレッスン。

夕刻、神戸市内の中国語教室での講師。

深夜まで音楽仲間三人とコンサートの音合わせ。

ある週前半の彼女の一日のスケジュールである。

電車を乗り継いで周辺の町を目まぐるしく移動する間にも、楽譜とMDを手離すことはない。通訳の仕事を静、陰とするなら、彼女にとつて音楽活動は動であり陽の発露。それらを日常のやりくりで巧みに均衡させて、李浩麗は一刻一刻を懸命に生きている。身長一五六センチの小柄な体には歌への熱い思いと、東シナ海の波濤を乗り越えてきた彼女の祖父、李通坐を思わせるような挑戦と進取の血流がみなぎっているようにみえる。日本人からみれば彼

女は外国人に違いないのに、我々がとうに郷愁の世界へ追いやってしまった、きわめて日本的な義侠（ぎきょう）の精神を彼女のきつぱりとした語り口のなかに垣間見ることがある。

「命がけて『豊かな国、日本』へ密入国した中国人たちを裁く法廷で通訳として働くとき、複雑な思いをもつことがあります。彼らは法を犯してまで日本へ渡り、日本の最底辺に居て日本の景気や企業利益に翻弄されるのです。確かに日本はアジアのなかでは飛び抜けて豊かな国。でも『豊かさ』ってなんだろうか、って思うことがあります。日本以外のアジアの国には、はるか前に日本から姿を消した情景や人々の友愛が残っています。そこには、貧しいけれど人間が手をたずさえ支えあって生活している温もりがあります。経済の発展からはとり残されているかもしれないけど、人が自然を敬って、畏れを抱いて謙虚に生活しています。」

李浩麗が自宅二階でモンゴルの古曲の練習に疲れてベッドのなかで深い眠りに落ちていた頃、浩麗の住む神戸市中央区から南西へおよそ二十キロ、明石海峡の海底からさらに深さ一万八千メートルの地殻のなかで、とてつもないエネルギーが岩盤を激しく震わそうとしていた。

一九九五年（平成七年）一月一七日午前五時四六分。李浩麗は今まで聞いたこともない、地底が吠えるような「ドーツ」という鈍い音とともに、家ごと突き上げられるような上下の激しい衝撃に襲われた。ベッドから起き上がることにすら出来なかった。体を縮ませたまま、激しい揺れに翻弄された。人形や、本や、衣裳ケースが崩れ落ちてくるのがスローモーションのビデオを見るように視界に入った。窓ガラスはみじんに破れて部屋に飛び込んでくる。激しい揺れは数十分も続いたように思えた。そして続けざまに襲ってくる余震のたびに体はすくみ、悲鳴すらあげることも出来なかった。すべては暗闇のなかでの出来事だった。

「みんな、だいじょうぶっ！ どこにおるっ！」

長い揺れが止み、部屋の扉を蹴破って真つ暗な廊下に這い出た李浩麗は叫んだ。

「みんなだいじょうぶっ！ 父さんはどこっ！ 母さんはだいじょうぶっ？」

「麗ちゃん、ここや、ここにおるよお！」

同じ二階の部屋にいる弟、建隆の叫びが聞こえ、浩麗は暗黒のなかに一筋の光を見つけた思いだった。

五六歳になる父、そして母、妹、弟は無事だった。夜明けにはまだ間のある暗闇のなか、一家は寝巻のまままでの道路に這い出た。たちまち零度近い寒気が襲ってきたが、寒さを感じるゆとりすらなく、五人の家族は言葉を失ったつなつたまま辛うじて倒壊を免れた家屋を見上げた。隣にあるコンクリート造りのホテルの一階部分は支柱が折れて座屈し、駐車場の車はビルの荷重をまともに受けてアルミ缶のように押し潰されていた。刺すような寒気なのか、街は不思議と静かで、家並みのなかには大惨事が自分たちを襲ったことがまだ信じられない多くの人々がいた。暗闇が破壊の全貌を隠していた。近くのコンビニで我先に商品を奪う者。争う声。夜明けとともに神戸の街が修羅場と化す直前の序曲を聞きながら、李浩麗はただ震えていた。

兵庫県を中心に二府十三県にわたって死者六千三百人以上、負傷者四万一千人以上の大被害をもたらしたこの地震は、のちに「阪神淡路大震災」と命名された。

*

「シャチョーっ！ 相談があるんじゃないか？」

私の会社に隣接する、PL（パーフェクトリバイ）西部教会教会長の家子さんから阪神大地震慰問の相談を受けたのは、大地震から二十日ほど経ってからだった。

PL教会を窓口に広島市民ボランティアチームを結成して、神戸の街へ救援に行くといふ。

岩手県生まれの家子さんは私と同じ世代。たまたま隣り合う私の事務所と彼の教会を、親戚のように行き来する親しい間柄が十年近く続いていた。北九州市を振り出しに、佐世保、広島、東京、名古屋と、数年ごとに各地の教会への転勤を繰り返したのち、広島西部の教会長として再び広島へと赴任した。

仕事とはいえ、彼は当然のことのように淡々と初めての任地を転々とする。その土地で物を売るでもなく、会社に勤めるでもなく、ただひたすらその土地に馴染んで、そこに住む人々の心と向き合う職に没頭するのである。

「シヤチヨーっ、お茶飲みにこんですかあ？」

廂（ひさし）を並べる隣の窓から家子さんが声をかけてくる。

「せんせい、いまお客さんじゃやえ、あとですぐ行きまーす。あつ、それよりせんせい、こつちへこんですかあ、アメリカから戻った友達が面白い話を聞かせてくれるところなんじゃあ」

窓ごしに私の声が相手に届く。

「りょーかい。ただちに向かいます」

家子さんの快活な返事。

十秒ほどで慌ただしくバタバタと階段を駆け上がる音がして、彼の眼鏡ごしに見えるクルクルした丸い目が私の部屋をのぞく。こんな付き合いだつた。

設計図を入力するパソコンやファクシミリ、電話の無機質な音が一日じゅう響いて、利益の多寡が話題の主になる私の事務所からわずか二メートルと離れていない建物のなかで、家子さんは奥深い人間の業（ごう）や悩み、喜びや悲しみ、あからさまな人間模様と二四時間向かい合う生活をしていた。

この教会では扉を開けるすべての人が「ただいま」と声をかけて、玄関に歩を踏み入れる。終日鍵がかけられることはない。

さまざまな思いを抱いて、教会員が彼が主宰する教会の扉を開ける。

「ただいま」

という声に家子さんは、

「お帰りなさい」

と声を返して、時にはその会員の肩を抱くように教会のなかに迎え入れる。教会員の「ただいま」という声の響きと表情から、家子さんはその人がきょう背中に負って来た思いの大半を知るのである。夫婦や親子の葛藤、子供の非行の悩み、結婚や就職のあっせん、トラブルの仲裁。商売の相談。

彼と隣合わせで過ごしたおよそ十年の間、彼は私との会話のなかでその宗教の教理について触れたり、入信を勧誘したりするということは一度もなかった。しかし彼の日常を知る私は、彼が信じる宗教の神髄と思えることを彼の言動の端々にうかがうことが出来た。「祈る」ことだけでなく「行なうこと」。「実行」すること。そして、人生を文学や絵画、音楽の創作にも通じる一編の「芸術」としてとらえ、理想とする具体のイメージを心において、時に修正し、誠を尽くしていこうという強い意志である。

「毎日、毎日、人と会って、話を聞かせてもらいます。それがもつとも大切な僕の仕事なんすよ。とにかく出来るだけ相手と同じ気持ちになれるように努力して、話に耳を傾けるんです。その人と一緒に学ぼうっていう気持ちでね。そして、その人のために祈ります人間って、病気や苦しみを抱えているときはとても純で、人間的になれるんです。苦しみから逃れたい一心でね。でも、その苦しみが薄らぐと、いつの間にかその時のことを忘れてしまふんすよ。純な、人間的な初心をそののちもずっと持ち続けてもらおうようにお手伝

いすることも、僕の大事な仕事なんすよお」
と家子さんは穏やかに話す。

彼は朝の祈りから始まるその教えを、いかに咀嚼（そしゃく）して日々の実践の規範や糧（かて）とするか、相（あい）に対する人と同じ目線でどう交流するかに心を砕いていた。

「すごいなー！」

「素晴らしい！」

「いいですねえー！」

「幸せな人だあ。まわりの人に感謝しなくちゃあ」

という言葉が彼の口癖だった。否定の言葉はほとんどない。

「とにかくなんでも、まず自分からやってみなくちゃね。人にこうしてほしい、やってみない、と愚痴を言ったり嘆いたりすることは易しいことだけど、自分が出ることやよく考えて、そして実行に移してみたら、案外とすいすい事が運ぶことって多いもんすよお。本当に小さなことからいいんすよお」

彼は我々が見逃している日常のささいな現象や、人のひそかな思いを鋭敏に見つけ出して、大げさな身振りで感動をあらわにする。そして、相手への予断を無地にして人と向かいあう。

私が日々の利益計算や経営の駆け引きに疲れた夕刻、玄関先の立ち話での彼の何気ない言葉に、涼風に出会ったような癒（いや）しを感じる事が幾度もあった。

「なんでも屋のようにいろんな相談を受けたり、広島じゅう走りまわっても、『うまくいきました』『解決できました』と教会員さんと喜びを共に出来ることって少ないすよ。僕ひとりの力って、たかが知れてるし。三十年近く教会にいて世の中の流れと人の心を見つけているけど、日本の繁栄につれて人の気持ちが荒（すさ）んできたって思うことが多いすよお。日本がこんなに裕福にならなかつたら、僕は失業してるかもしれんね。物やお金が増えるほど、日本は貧しくなってきたんじゃないかと思う」

いつだったか家子さんが、縁なしの眼鏡を外してレンズをハンカチで拭いながらつぶやいた言葉である。

会社員のお父さん、美容院を経営するお母さん。両親の勧めで彼は小学校を卒業とともに岩手県の生家を離れた。仙台市内の大学を卒業した彼は、地球全体を教区とするPL教団の教師としての道を選んだ。宗教に身を委ねた瞬間から彼は生まれ故郷、岩手県を捨てていく。

「小学生の頃は三メートルもの雪が降ってねえ、雪の朝には大人たちが総出で子供たちの登校のための道を作るんすよ。雪の上を『カンジキ』という竹で作った輪を長靴にくくりつけて、雪を踏みわけて一列になって学校へ行くんです。吹雪の日はメートル先も見えなくなってしまう。学校へ着くと薪を焚くストーブがあつて、みんなその周りへ弁当を置いて温めるんすよお。教室じゅうになんともいえない臭気が漂ってねえ。縦横に連絡洞のある『かまくら』をいくつも作って、かくれんぼなんかしたなあ。体じゅうびしょびしょになって、竹スキーに下駄スキー。野球なんか雪の上にベースおいてやっちゃうからねえ」

「みちのく生まれの家子さんの昔話には、長い冬のあいだ町じゅうを埋め尽くす深い雪にまつわる逸話が多い。北国の冬の陽は短い。もちろんテレビゲームなどもなく、テレビすらも日常のものでなかった当時、小学生の家子少年は長い冬の夜をどのように過ごしていたのだろうか。」

「生涯を同じ土地で暮らすのはもつたないなあ、なんて思っていました。地球は広いわけだし、せめて日本中あちこちの町で暮らしてみたいと夢見てたなあ。それに、母の影響もあって、人の為になにか役にたてる仕事につきたい、なんてぼんやり考えてました」

「

東北新幹線・北上駅からさらにJR北上線で山間部を西へ一時間。東北の名湖、田沢湖にも近く、地名のとおり、湯湧き、緑濃い岩手県和賀郡湯田町が彼の生地である。

「お宅の会社の商品、安う譲ってもらえんじやろうか。神戸の人に温かいもの食べさせてあげたいんじやあ。協力してもらえるとホンマありがたいんじやけど。広島の『お好み焼き』がぴったりじやいうて仲間とも話したんよ。うってつけの会社がうちの教会の隣にやああるもんね。おまけにワシ、その会社の社長と友達じゃけえ。」

いつもの標準語と広島弁、それに東北なまりの交じったヘンテコな発音で、彼はほほ笑みながら私の顔をのぞき込むように語りかけた。

私の会社の食品工場で毎日生産している「広島流お好み焼き」を神戸に運び、現地で温めて被災者に無償で配りたいというのである。

家子さんは計画を細々と説明する。教会のネットワークを通じて集めた被災地の情報、日程、スタッフの動員計画、資材調達計画、車両計画、安全規定、道路情報。熱っぽく語り続ける家子さん。

大地震が発生して以来、連日トップニュースで報道される阪神淡路地区の被害を目のあたりにしている私は、彼の話の中途でさえぎるように答えた。

＊

土曜日の夕刻、広島を発った私たちトラック十台の車列は山陽道を東に向かった。

神戸を訪れるメンバーは家子さんをリーダーに総勢八十人。被災地近くから刻々入る情報のとおり、被災地周辺は戦場を思わせるような異様な状況だった。

デコボコの車体、傷だらけで逃げるように市外へ出ていく車。物々しい自衛隊のトラック。「緊急物資輸送中」の標示を掲げた大型トラックの群れ。

夜明けを待つて神戸の街に入った我々は、朝日のなかに浮き上がる街の惨状を目のあたりにした。車中の皆が急に寡黙になる。車が街角を曲がるたびに私は息を呑んだ。表通りに面した鉄筋造りのビルはかるうじて姿を留めているものの、一步裏通りに入ると、民家や商家のほとんどが正確なピンポイント爆撃を受けたように無残に倒壊していた。まったく無傷の商業ビルのすぐ隣に、ダイナマイトで破壊されたような民家が瓦礫の山と化していた。周囲三百六十度を見渡すことのできる情景は、のっぺりとした平面のテレビニュース画面とはあまりにも異なっていた。

私たちの向かう東灘区本山第三小学校一帯ではおよそ千人が犠牲となり、死因のほとんどは建物の下敷きによる圧死であった。熟睡していた人々は突然落下してきた数トン、数十トンの荷重に押し潰され、身動きすら出来ないままに絶命した。そして、断末魔の叫びをあげる人に、火炎が襲ってきた。街なかには夜が明けてしばらく経つというのに、人影はほとんどない。死んだ街であった。

一九四五年（昭和二十年）日本敗戦の年の二月四日。神戸はカーチス・ルメイ將軍指揮のアメリカ空軍による、日本本土無差別爆撃の最初の目標都市に選ばれた。

その日、午後二時から二時間にわたってB29一二九機が工場地帯と民家、港湾を無差別に爆撃した。そののち、三月、五月、六月と三度にわたって大規模かつ無差別の焼夷弾爆撃を受け、終戦までの六ヶ月間で神戸全市は町の四方が見渡せる灰燼の原野となった。二月初空襲から終戦までアメリカ軍による神戸への爆撃日数は延べ八三日、爆撃に加わったB29の機数は延べ三六六二機、犠牲者八八四一人、家を失った市民は五八万九千人余を数え

た。米軍の神戸空襲による死者数は「阪神淡路大震災」の死者にほぼ匹敵する。この一連の波状爆撃は地上に住む人間を日本人、外国人と識別することは一切なく、その頭上に爆弾の雨を降らせた。多くの華僑たちが神戸市民と運命を共にした。

一九三七年（昭和十二年）の蘆溝橋事件をきっかけに中国とドロ沼の戦争状態に入った日本軍部は、日本に在住する華僑を「敵国人」「シナ人」としてさまざまな迫害を加えた。特別高等警察（特高）の厳しい監視下、華僑は仲間同士の交流や集会、自由な移動さえも許されず、ささいな違反には苛烈な拷問と投獄が待っていた。華僑たちは生まれ故郷を捨て、日本を第二の故郷として日本社会に溶け込もうと血のじむような日々を送っていたが、ひとたび日中間に戦端が開かれるや彼らはたちまちにして職を失い、教育の機会を奪われ、その日の食糧にもこと欠く辛苦を味わったのである。

現在、神戸中華総商會會長を務める中国福建省出身の華僑、林同春氏（七六）は、その七十年近い日本在住の波乱に満ちた生涯を回顧した著書「華僑波瀾万丈私史」橋渡る人」（エピック社刊）のなかでこのように書いている。

（父親の）行商に同行する（小学生の）私は、やはり他の子ども達とは違っていた。日本のようにほとんど同じ民族だけで暮らし、外国とも長く交わらずにきた国民は、何かにつけて人と同じであることを重視する。他の人と何が違っていることに對し、ほとんど罪であるかのような意識さえ抱く日本人にとつて、私は特異な存在であり、ある者にとつては不快な存在だった。私自身の中に、中国人であるという深い自覚があったわけではないし、何人でありたいという強い思いがあったわけではなかった。けれど私を指差す人の姿を目にし、『シナ人』とささやく人の言葉を耳にするにつけ、私は自分が中国人であることの自覚を強くしていった。私を中国人に育て上げてくれたのは、父母と、日本に来るまでの九年半、私を育ててくれた中国大陸であることはもちろんだが、それ以後に私が接した多くの日本の人たちだった。シナ人という陰口を聞くたびに、私は中国人としての誇りをもつことの大切さを知り、侮られるたびに、より立派な中国人になりたいと思うようになった。

十六歳の林少年は父の仕事である古着の行商を手伝うようになり、ある時岡山県の道なき深山を歩くうちに県境を越えてしまう。スパイの疑いをかけられ、特高に留置された林少年は一日三時間わたる容赦ない拷問を受けたのち釈放された。いわれない嫌疑による留置、拷問はそれから幾度も林少年を襲った。

そして日本敗戦。華僑は一夜にして「敵国人」から「戦勝国人」となった。神戸に進駐した米軍は同じ戦勝国の国民である華僑中国人たちに対し、圧倒的に豊富な物資を提供した。しかし、日本国民の日々の飢餓と塗炭の苦しみを知る華僑たちは、快哉を叫んでそれらを受け取ることをためらった。

日本敗戦直後、岡山県津山市内で食堂を営み始めた林同春氏はその頃のことをこう回想している。

様々な人々の姿があった。（中略）一杯の雑炊を三人の子供達にだけ分け与え、それを隣でじつと見ている中国からの引揚者の母子がいた。一椀の食べ物の前に、それぞれ境遇があぶり出されてくるのだ。母親の放心したような疲れ切った表情が痛ましさを募らせた。私は黙って雑炊をもう一杯机の上に置いた。『違いますっ！』驚いて声を上げる母親に、私は黙って首を振ってテーブルを離れた。さらに何かを言いかけた母親が、口をつぐみ私を見つめて深々と頭を下げた。私は少し口元を緩めてうなずいた。母親が子供たちの前にどんぶりを押しやると、奪い合うようにして子供たちが口をつけた。店を出ていく母子を見ながら、彼女達の行く先を思わずにはいれなかった。テーブルには、結局母親が口をつけることもなかった二つのどんぶりが、まるでなめたかのようにきれいになって残っていた。

戦後の神戸の復興は、国際港・神戸港を舞台とした華僑の商人たちのたぐい稀な商才と情報ネットワークによるところが大きかった。彼らはいち早く海外に居住する華僑たちの支援を受けて商売を復活させ、市民生存のための流通を確立させたのである。米軍の爆撃で壊滅した町が、日本有数の都会に復興してちょうど五十年。

巨大な地震によってふたたび神戸は壊滅した。

本山第三小学校の避難者は約七百人。教室が仮住まいである。周辺には二千人近い被災者が庭先やガレージにシートを張って生活している。小学校の校庭にテントを張り終えた我々は、さっそく手分けをしてお好み焼きの準備を始める。広島から持参した大釜でパツクに入ったお好み焼きを袋ごと煮沸したのち、何台もの鉄板の上で焼き上げるのである。お好み焼きの配給をラジオや掲示で知った被災者が、続々とテントの前に集まり出す。みるみるうちに行列が出来る。欠けた陶器の皿を持つ人、へこんだ鍋を大事そうに抱える人。一ヶ月におよぶ避難所生活を過ごしている彼らの顔色は土色のように、着たきりの衣服から異臭の漂う人もある。笑顔はほとんど見られない。

私の会社から運び込んだお好み焼きは二千五百食。錯綜する情報をもとにはじき出した数だけに不安が残る。

「ひとりにくつまで、と数の制限をせんといけんのじゃない？」

「いや、それはいけん。家族の多い人はどうするん？ ここは年寄も多いんじゃけん」

「申し出の数だけ渡してもうたら、みんなに行き渡らんようになることもあるでえ。数が足りんのが一番困るよお」

「整理券、という手もあるのよ」

鉄板の支度をしながらのあわただしい議論である。

「疑ごうたらキリがないよ。並んでいる人をお願いして、事情をわかってもらおうよ。信じようよ」

家子さんの一声で、お好み焼きは行列に並ぶ人からの申し出のまま無制限に配ることになった。

二月の寒風が吹きさらす校庭に、大釜から立ちのぼる湯気が舞い上がり、鉄板の上でソースの焦げる香ばしい匂いがあたりに漂った。

私に同行した小学生の息子が行列の人数を何度も数えてテントへ報告する。

「ただいま六十人！ まだ増えとる！」

校舎で暮らす被災者に加え、学校周辺に住む被災者や各地から救援に来ているボランティアの団体も行列に加わる。

「百二十人！ ひとり平均三個として、えーっと、三百六十個じゃ！」

大釜のなかから次々と温かいお好み焼きが取り出され、鉄板の上で焼かれる。

大阪から歩いて神戸まで救援に来たという、女子大生のグループがソースを塗る、皿に盛り。行列する被災者に家子さんが一人ずつに声をかけながら、湯気の立つお好み焼きを手渡す。見る間に見事な製造と配給のシステムが出来上がった。

しばらくして、我々のテントの近くに一団のグループが校庭に青いビニールシートを敷き始め、スピーカーやマイクロホンをワゴン車のなかから運び出した。数人の男たちの手ぎわ良い作業で、急ごしらえのステージがまたたく間に出来上がった。

お好み焼きを焼きながら、遠くから私はその情景をぼんやりと見ていた。

やがて、黒いつば広の帽子を被った小柄な女性がシートの中央に立つマイクロフォンにむかって語り始めた。

「本山小学校で不自由な暮らしをしておられる皆さん、こんにちわ。お休みのところをこめんなさい。私たちは神戸で暮らす、在日外国人や留学生のグループです。きょうは皆さんに少しでも寛（くつろい）でいただければと思って、仲間と一緒にみなさんにお会いしにやってきました」

小柄な体には不似合いな、きつぱりと歯切れのいい声が彼女を取り巻く聴衆の耳をうった。

「このたびの地震で私たちの仲間も亡くなったり怪我をした人もあります。でも私たちはなんとか生きのびて、こうして元気でいます。神戸に住む私たちは在日外国人は学生も多くて、お金や物資をみなさんにお贈りする力はありません。でも、私たちは私たちが出来ること、歌や踊りをみなさんにご披露して、みなさんにくつろいで頂きたいと思いました」

教室のなかでお休みの方、うるさいと思われるかもしれませんが、どうかしばらく私たちをお許し下さい」

笑みをたたえて、その歌手は聴衆に語り続ける。

お好み焼きのテントから離れた私は、引き寄せられるようにステージを取り囲む聴衆のなかに立った。

彼らは神戸市内の魚崎小学校、この本山第三小学校を皮切りに、順次七、八ヶ所の学校避難所を慰問に巡回するという。

「私の名前は李浩麗、リーハオリです。神戸生まれの台湾人です。私は日本の学校で日本の唱歌をたくさん習いました。そのなかで私の思い出に残るいくつかの曲を聴いて頂きたいと思います。まず私が大好きな歌、みなさんもよくご存じの『ふるさと』を聴いてください」

テープの伴奏に乗って、骨組みのしつかりしたソプラノがスピーカーを通して校庭じゅうに響いた。甲（かん）高くなく、聴く者をゆったりと包みこむような穏やかな声であった。毛布で体を包み、立ったままの老人はその歌に合わせるようにかすかにくちびるを動かして始めた。さつきまで校庭を走り回っていた数人の子供たちは、ジャンブルジムのてっぺんで、身動きもせず歌手の歌に聴き入った。一人、また一人と、粗末なステージを囲む人の数が増えていった。

うさぎ追いしかの山

小ぶな釣りしかの川

夢はいまもめぐりて

忘れがたきふるさと

いかにいます父母

つつがなしや友がき

雨に風につけても

思いいづるふるさと

こころざしを果たして

いつの日にか帰らん

山は青きふるさと

水は清きふるさと

高野辰之作詞 岡野貞一作曲

私は思わず自分だけに聞こえる声を出して、李浩麗の歌声に歌詞を重ねていった。あたりを無残に破壊された瓦礫の山に囲まれ、難民のように粗末な身なりをして力なくたずむ被災者のなかにおいて、『ふるさと』の旋律は言いようなく、情けなくて、切なくて、悔しくて、ならなかった。

家子さん、仲間、会社の社員や息子たちとほとんど眠ることも出来ず、夜の山陽道を神戸へと駆け通した疲れが私の神経を昂ぶらせていた。

『ふるさと』の歌詞を口ずさむうちに胸の底がこみ上がってきて、肩が上下に震えた。涙があふれ出た。涙をこらえようとも思わなくなった。

一心に歌う李浩麗の姿が涙にかすんで見えなくなった。頬に水滴が伝わり落ちてきて、二月の寒気に触れて氷のように冷たくなった。

李浩麗の歌う『ふるさと』が終わったとき、私はその場にいたたまれなくなってしまつて、誰もいない校舎の裏手に走りこんだ。そして、拭うことも出来ず涙を垂らした。

一瞬にして廃墟となった街に暮らす無数の人々の上に日が昇り、そして暮れていく。目の前に広がる神戸の町の惨状。うなだれる同胞たち。まさかこの現代に、見ることはなかったはずの情景が眼前にある。

日本が戦いに破れて三年目の冬に私は生まれた。その前年施行された新しい憲法とともに私は育ち、日本の復興と歩を合わせるように成長して社会人となった。

経済の発展や豊かさこそが人間を苦役から解放し、平穏な明日を約束するものと信じていた。校庭のステージから逃げるように校舎の陰に走りこんだ私は、私自身がたどってきた道を振り返りながら考えた。我々はこれまで何を獲得してきたのだろうか、そして何を失ったのだろうか。そして自分が毎日、多くのものを犠牲にして働き、獲得しているはずの成果が、気まぐれに起こる大自然の現象の前に余りにも無力で、無意味なものであることを。

日本敗戦以来、先人や我々がひたむきに構築し続けてきた様々な秩序や価値、システム、資本は、我々人間のもつとも素朴な願いであるはずの「生存の維持」すら約束するものではないことに慄然（りつぜん）とする思いだった。複雑きわまりなく張り巡らされた社会システムがひとたび瓦解したとき、太陽光を除くほとんどの生存条件が崩壊し、「飢え」がすぐ目の前に迫ってくることに気がついた。

我々が文明や繁栄と呼んでいるものは、巨大な岩盤の上に敷かれた一枚の薄い和紙ほどの厚みしかないことを。

テントに戻ると配給のピークはすでに過ぎていて、行列に並ぶ人の数も少なくなっていた。

当初の不安は外れて、お好み焼きの数はまったく不足することはなかった。

行列するすべての被災者は遠慮がちに必要な数だけを申告し、なかには他人への配慮の余り、一枚のお好み焼きを家族で分け合いたいと申し出る人もあったという。

「広島も原爆のとき、大変やったんやてなあ」

と、五十年前をきのこのように語りかける、お年寄り。

無表情な被災者が多いなかで、

「きょうの味は一生忘れへんで。いつかご恩がえしするさかいにな。やっぱりお好み焼きは広島のもんや。大阪は負けや」

と笑顔で話してくれた、おばさん。

悲惨な状況のなかにおいて、気を奮い立たせて人間としての品格をかるうじて保とうとしている多くの人びとの姿を、私は確かにこの目で見た。

家子新太郎さんは震災慰問の直後、愛知県豊橋市への転勤が決まった。親しい仲間たちと開いた送別会の席上、奥さんのひとみさんを伴って出席した彼は、お別れのあいさつをこう結んだ。

「定年になったのちも、僕は生まれ故郷の岩手県へ帰ろうという気持ちはありません。日本のどこかで、ひよっとしたら外国の町かもしれないかもしれませんが、住み心地のいいところへ住んで、災害や戦災にあつて困っている人たちのところへ飛んで行って、ボランティアとして彼らのために働きたいと思っています。そのために、体力とお金を蓄えることをこれからも心がけたいと思っています。九州や東京での在任はせいぜい二年でしたから、三年間過ごした広島は僕にとって第二の故郷ともいえる地です。この広島で、こうして教会関係者以外の人たち、みなさんのような温かい気持ちを持った人たちと出会えたことは、私の生涯の幸運だったと思っています。」

家子さんがこの宗教に帰依することとなつたきっかけは、彼にとって今思えば小さな出来事からだった。

岩手県湯田町の小学校を卒業した彼は、成績優秀な彼を親元から離すことで知力のみでなく、情操においても自立した人間に育てたいという両親の願いから、生家から二百キロ離れた宮城県仙台市の私立中学を受験することとなつた。

受験のため仙台市内の旅館に母子で泊まっていたときのこと。

山あいの生家を出て初めて訪れる大都会、仙台市の旅館で入学試験を翌日に控えて不安な表情を隠さない母子に、旅館の女将さんが二人の緊張を和らげるように声をかけてくれた。

「お二人の願いが叶うように、私と一緒に祈りませんか」

女将は近くのPL教会へ親子をともなつた。無事、その中学へ入学を果たした家子少年はこのとき体験した、それまでまったく未経験の「精神の世界」に強く興味をそそられた。早熟で多感な少年だったに違いない。

中学から大学卒業まで仙台市内での下宿生活を通した彼は、その間折りにふれて教会の扉に手をかけるようになる。彼はその都度、

「お帰りなさい」

の言葉に迎えられる。

大学を卒業した彼は品物や金のやりとりとは無縁の、ひたすら人の心と向かい合い、人のために祈ることを生涯の職として選んだ。旅館の女将との偶然の出会いが、彼のその後の人生の過半を方向づけることとなつた。

十二歳で生家を出たまま、少年の頃の夢そのままに日本国中を転々と暮らし、人のために祈りつつ晩年は異国で朽ちることもいとわれない家子さん。広島に生まれ育ち、広島を終（ついで）の場所と信じる私はたまたまこの地で彼と遭遇した。

彼と隣り合つて過ごしたおよそ十年の間、彼は私に示唆多い清新な風を送り続けてくれ、転地の先々で彼が出会つた人々の暮らしむきや、土地土地の風土をいとおしむように私に語ってくれた。そして私たちはともに震災の神戸へ。

家子さんと私はそこで華僑の一員でありながら、我々よりもっと日本人的な矜持を感じさせる歌手、李浩麗さんに出会つた。

国と国、人と人との境を超越する彼女の声曲は犠牲者への鎮魂の歌であり、廢墟の神戸で交差した多くの人々の出会いの讃歌のように聞こえた。

祖国の一都市が無残に崩壊したさなかの出来事は、ことさらに私の胸に染みいった。

夕暮れのなか神戸を後にした車中で、私は私の故国の来し方や、神戸で出会つた沢山の人の心奥にあるそれぞれの故郷のことを考え続けていた。

阪神淡路大震災から四年。復興の工事が今も進む神戸市の李浩麗さんから私のもとに一枚のCDが届いた。李浩麗さんのボーカルに、日本人の演奏者によるトランペットとキーボード、ギター、四人からなる音楽グループ「ラ・アルカント」による音楽CDである。CDのカバーに印刷されたタイトルは「ふるさと」。

あの日、神戸本山第三小学校の寒々とした校庭で聴いた「ふるさと」をはじめ、「四季の歌」「花」「夏の思い出」「里の秋」などの日本の唱歌とともに、中国の民謡「草原情歌」、「鳳陽花鼓」、中国青海省の民謡「在那遙遠地方」、沖縄の「花」など、地球全体を故郷とする華僑の一員にふさわしい選曲であった。

CDに添えた手紙のなかに李浩麗さんは、震災直後のことを回想してこう書いている。

《 私たちは外国人です。震災の慰問で被災地を回ったとき、中国の民謡や韓国の民族舞踊を果たして被災者の皆さんに受け入れてもらえるかどうかが一番心配していたことです。外国人の私たちが国々の民族衣装で踊ったり、歌ったりすることで、束の間でも皆さんに辛い思いを忘れていただきたい、と思いました。

ぜひ聴いて頂きたかったのは日本の童謡と唱歌でした。あの殺伐とした状況のなかで、人々にほんの少しでも安らぎを感じてもらえる音楽、それは童謡や唱歌だと私は思いました。そのとき自分に出来ることといえば、ただ精一杯歌うことだけでした。

演奏で回った避難所に住む人たちの人間模様がとても印象に残っています。ただだから貪欲に何でも持って帰ろうとする人。えげつない人もいれば、あの極限の状態のなかとは信じられない、鳥肌のたつような感激を与えてくださった人。予想もしない出来事にいくつも遭遇しました。人生すべての体験がわずか数ヶ月に凝縮したような、数え切れないほどの経験をさせていただきました。

ひとつ思ったのは、日本人のすぐれた国民性です。あの筆舌に尽くしがたい状況のなかでもよくも暴動なんか起きなかつたものだ。やっぱり、すごい、と思いました。

冷静で思慮深い多くの人たちに出会いました。ある小学校で滝廉太郎の「花」を歌った時のことです。学校を離れる間際、手に杖を持ったおじいさんが不自由な足で一生懸命私の方に歩み寄ってきて、私の手を握って話して下さいました。

「僕の妻も娘も共に二人、家の下敷きになって、僕の目の前で亡くなっていったんです。僕はよく妻と二人で地域のコーラス活動に参加していました。滝廉太郎の「花」は大好きな歌なんです。果たして僕はいつこの曲をまた歌えるんでしょうか。その日がまた来るんでしょうか。」

と冷静に語ってくださったことを今でも忘れることが出来ません。最後には「ありがとうございます。がんばりなさいよ」と私を励ましてくださって。励ましに伺ったのに、逆に私の方が励まされて胸が一杯になってしまつて、お返しする言葉がありませんでした。

日本という国、私は大好きです。今までの人生の半分以上を日本で過ごしているのですから。父によく言われるのが、「郷に入れば郷に従え」という言葉。よその国に住んでいる以上、その国の人たちと同じように賢沢に色々な物事を求めるべきではない。嫌いであれば、その国を離れるべきだ、と父に言い聞かされて育ちました。

思ったことをはっきり言わない日本人、イエスなのかノーなのかはっきり解らない日本語。一時期このことをとても疑問に思ったことがあります。思ったことをはっきり言うこと。そして、それを堂々と表現できる社会を築き上げてほしいと、今も思っています。

日本を尊敬する部分もたくさんあります。戦後わずか数十年で国際社会のなかで今のような経済的な地位を確立したこと。日本人がいかに「会社」という組織を大事に思い、重要視しているか。そしてきわめてよく働く。それも自分のためだけでなく、会社のために一生を捧げる人もいる。アジア、とりわけ東アジアの人からすれば信じられない発想です。良

いこともあって悪いことが見えてくるのだと思います。両方ひつくるめて、私は日本を愛しています。

華僑の商人が忘れることのない言葉があります。それは「衣錦還郷（イー チン ファン シャン）」という言葉です。日本の「故郷に錦を飾る」という言葉とまったく同じ意味です。私は『ふるさと』の歌詞のなかで三番のフレーズがとても好きなんです。

こころざしを果たして

いつの日にか帰らん

山は青きふるさと

水は清きふるさと

この歌詞を歌うとき、私はいつも李通坐おじさんのことを思います。二十歳で台南を離れて、初めての外国、日本をめざして東シナ海を渡るとき、通坐おじさんはきつと「衣錦還郷」の言葉を思ったことでしょう。故郷を離れたものでないと、故郷のありがたさを知ることができません。成功して帰る人、失意のなかに帰る人。故郷の自然はいつも同じ顔で温かく迎えてくれます。

私たち華僑は「浮葉」のごとく定めるところがないと私は思います。私たちの社会には「落葉帰根（ルウオ イエ クウエイ クウン）」という言葉があります。繁る葉も落葉となり、やがて根に還るときがくる、という意味と私は理解しています。

国境を超えて生きる私たち。一体自分のお墓はどこに作ればいいの？ 日本の方には理解しにくいことも知れませんが、このことは私たちにとってはとても重要なことなのです。生まれ故郷ではあるが、誰もお墓参りもしてくれない地にお墓を作った方がよいのか。それとも本当の生まれ故郷ではないけれど、親しい皆の声が聞ける地にお墓を作った方がいいのか。とても迷うところです。

私には二つのふるさとがあると信じています。日本と台湾、神戸の町と台南の町。そこに住む人たち、山河。震災の時に『ふるさと』を歌いたいと思ったのはこんな私の思いからです。地震に遭った方すべてが神戸で生まれた人ばかりではない。でも、そこに居る人たちは、転勤先であったり、留学先であったり、移住してきたり、少なくとも神戸を何らかの形で故郷と想っている人たちばかりだと私は信じています。日本、そして神戸が、私にとって大切な大切な私のふるさとであるように。》

了